

「ぼくも一緒に考えさせてもらおうか」

—四十七年ぶりの長等幼稚園訪問—

津 守 眞

長等幼稚園最初の訪問

私が大津市の長等幼稚園を訪ねたのは、昭和三十五

(一九六〇)年だった。

そのころ、幼稚園で粘土というと、一人ずつ粘土板を配られ、課題を与えられて、机の上でお団子やへびを作るのが通常だった。私が見た長等幼稚園では違った。両手で抱えるくらいの大きな粘土の塊がホールの真ん中にドンと出してあった。子どもたちは木の枝や空き缶などを粘土に挿しこみ、部屋全体がモダンな生け花のようだった。何人もの子どもたちが部屋を出たり入ったりし

て昼の弁当まで活動は続いていた。私は思わず引きつけられて見ていた。

ひとクラス四十人もの子どもたちの、クラスを超えての活動だったので、どの子どもが参加したかを確かめるために、子どもの背中に背番号が貼りつけてあった。毎日それを記録し、遊びの様子を職員皆が話し合うとのことだった。ほかの部屋では同じようにクラスを超えて、ままごとやおうちごっこをしていた。子どもたちは大きなダイコンやニンジン、菜っ葉を自分の家から持って登園してきた。親が本物の野菜を持たせるのだという。先生たちの注ぐエネルギーは大変なものだったろう。

四十七年ぶりの訪問

二〇〇七年九月五日、私は四十七年ぶりにこの幼稚園を訪ねた。園舎は建て替えられていたし、そのころと同じ自由な保育の姿が見られるとは私は期待していなかった。むしろ、以前とは全く違っているのではないかと恐れていた。私が訪ねると、広いホールや保育室には子どもたちの活気ある声が響いていた。私が久しぶりに訪問するということで、この日は特に、八十八歳になる当時の今西孝子園長が私に会いに来てくださった。当時と変わらぬ張りのある声だった。

今西 ほんま、子どもは楽しいから幼稚園に来るのだから、何が楽しいのか見ようと思ひ、私は子どもをジッと見て、ほっといた。幼稚園には六領域というのがあつても、これで教育と言えるのかしらんと思つて、私は子どもが動くままにほっといた。砂場で山を作つて子ども

たちが遊んでいる。三、四人がうつむいて遊んでいる。ソーツと見に行ったら、子どもたちは水を流したその跡がどうなるかを見ていた。「掘つてみ」と子どもは言っていた。「水を入れてみ」と私は言つてしまった。「こつち水を入れてみ、あかん、また、水がなくなる」。水が砂に染み込んでしもうた。これが子どもが知つていく最初でしょ。これが日常の生活で、子どもの毎日の姿でしょ？ 未知数の中から知つていこうとすることが教育ではないか。これを子どもがどう見つけていくか。

関西弁は相手との受け答えが滑らかである。東京言葉にはない滑らかさがある。私はそのころ、大津の教育委員会会の指導主事だった河邊泉先生の話しぶりを思い出した。昭和三十五年五月二十八、二十九日に日本保育学会が大坂樟蔭女子大学で開催されたとき、大会が終わつて次の日に当時の学生さんたちと一緒に訪ねたのだった。そのときのこの幼稚園の大規模な活動に圧倒されたこと

は忘れない。今西先生が園長で、今日と変わらない話しぶりだった。今西先生の話は次から次へと続く。

河邊泉先生と今西先生

今西先生はポケットにメモ帳を入れていて、どの子が、毎日、何時、どこに行つてどうしたか、それがどう発展するか、継続するかどうかを書き留めた。先生たちも同様だった。私は子どもの目の前でメモをすることはしないから、この点は違うけれども覚えていられるように頭の中に刻む努力をする。また、帰つたらできるだけすぐに書き留める。

今西 子どもが登園して八時半になったら何をするかと決めて日課を進めること自体がそれでいいのか。それで子どもたちはいきいきしているかどうか、子ども自身が求めているものがなかったら、何も出てこないでしょ。次に粘土入れようか、石入れようか、あんなら何入れよ

うかと子どもは自分で考える。そこで先生が必要になる。そこに友達が出てくる。そういう生活を始めた。

私は子どもがわからなくなった。六領域とか何とか言つて、子どもが迷惑しているかもしれないし。河邊先生にそのことを話すと、「おもしろいこと考えたなあ。ほくも、そこまで考えたことなかったが、ほくも一緒に考えさせてもらおか」と答えが戻つてきて、そこからこの遊びの保育が始まったのです。

「ほくも一緒に考えさせてもらおか」という関西弁の力は大い。東京言葉だったら「その方針でチームを組んでみましょう」となるのだろうが、そのよそよそしさではない、ごく自然な会話である。

今西 それからいろんな材料を出したらどうか、場所を変えたり、色を変えたり、河邊先生の示唆を得て、環境のつくり方をほんとに考えた。「その小さな紙一枚をど

ここにおいて、どうしたらいいか。考えてごらん、どこにおいたら結果がどうなるか、子どもはどうするか、あった自身の研究や」と河邊先生に言われた。

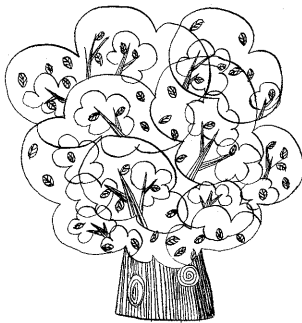
その後、現在の幼稚園の先生方も加わって、会話は更に続いた。私は関西弁では話せないから、ここでは、今西先生の話私の言葉で記すことにする。

子どもの見方に立って積み重ねられる遊びの保育

今西 大学を出た(ばかりの)人は、結果だけを見て、日常生活の積み重ねから出てくる行動を無視する。理論的に解釈して抽象的なものの言い方をして、内容の積み重ねの上に立たない。もたもたしたプロセスが省略されてしまう。はつきりとした結果がすぐに出ないことは大事にしない。そのとき、私は子どもがすることをジッと見ていたから、何年たってもそれは生きています。子どもが筋道を見つけていくのだから、早いこと大人が解

決してはいけない。

「ぼくら何してんの？」と子どもに聞いたなら、掘っても掘っても何も出てこない。何が出てくるかわからない。何も出てこない。子どももわからないから出てきてほしい。知りたい。子どもの何が出てくるか、光った石が出てくるかもしれない。黒い石かもしれない。そのときには何も出てこない。私にも、何が出てくるかわからない。明日への望みがあるからこそ、今日は終わりにしようと思つた。「足を突っ込む人がいると危ないから、砂穴は埋めとき」と言つてこの日は終わった。こういうことから毎日の保育は始まるのです。このことがわからないうちの先生に出会った子どもは気の毒です。そこがわかってから後の子は幸せです。



これまでやってきたことを、毎年のんびんだらりとやっているのでは、それは先生のこしらえごとです。子どもがワーツと喜んだときは、内容の善し悪しはわからないが、そこには子どもの感動がある。前進がある。そこには未知数の怖さや危険があるが、子ども自身が考えていく道筋があります。子どもが学び方を知っていくことを大事にする。そうしながら、自分なりの考えがわかっていきます。五歳でわかったことが、八歳になって確かになる。小学生になって幼児期のことを思い出すかどうかかわからないが、先生から教えられたことをやっていくのではなくて、自分でわかったことをするのだから確かです。幼少の連携と昔から言われるが、この点が重要なのではないのでしょうか。

砂場で穴を掘っていても、子どもはいろいろ違います。必ず子どもは何かを手もとに発見します。間違えてあっても、子どもは残念ではない。喜びながら残念がつていることがあります。あるときは自分が求めて失敗することもあるし、あるときは成功します。

私が新任のとき、あのぶらんこで遊んでいた子どもは、その後何した？ と河邊先生から聞かれました。その先生は子どもがしていたことを見ているだけで、何を楽しんでいたかを見ていなかったのです。その子どもはぶらんこをしていたのではなくて、遊びを見つげるためにぶらんこをしていたのでした。「明日そこを見てごらん」と河邊先生は言われた。

「だから、子どもは自分のクラスがあつてないようなものですよ」。私はこう言いながら、先生方は大変だと思つていた。子どもからもらうようにしたほうが与えるよりよい。次をどうするかという期待をもちながら子どもから教えてもらうのです。それを続けてやっていくことが難しい。

自分が実践してきたことはいつまでも色あせない

今西 今自分の園を見ていると、行動している今しか見えない。予想されない行動はハズレていると思う。今の若い人はハズレるのが嫌だから、予想したことはその

通りにしようと考える。あまり同じだったら研究の必要がなくなる。

今西先生の話は途絶えることがない。初期の天津では、先生たちに子どもから学ぼうとする姿勢があった。

今西 子どもは自分から方向転換をする力をもっているから、それを待つていれればよい。幼稚園ではこう指導しなさいと言ったら、このようにこしらえなさいということになる。こういう基本的なことこそ教えないといけない。葉っぱが黄色であったも、子どもには赤く見えるときがある。子どもを信頼するならば、それをウソと言うのではなく、自分が子どもに通じるときは、子どもと先生は信用し合っている。そこが教育だ。先生と子どもは暗黙のうちに通じ合っている。互いに信頼し合える。そこに教育がある。

自分が実践してきたから、昔の話も色あせないでしょ？ 一人の子がもう一人の子のぶらんこを取った。

どうするかなどと思って見ていると、子どもが「お前が悪い」と言って、乗ってる人を降ろしている。

津守 今西先生が河邊先生を教育したのですね。

今西 あのととき、親がそんな保育をやめてくれ、遊んでばかりいてと言ったことがありました。河邊先生に言ったら、やめんでもいいとひとこと言われた。

長等幼稚園が四十七年前も今も、遊びの教育を同じように実践しているのを見て、私は心強く思った。

その後、河邊先生は坂元彦太郎先生に誘われて東京の大学に移られた。私は時どき河邊先生と話す機会があった。二〇〇二年六月に亡くなる数年前、どちらから言い出すともなく、あるときは鎌倉で、あるときは東京で、私どもは昼食を共にして話し合った。

今西先生のお宅は、長年楽しんでこられたコサージュの花でいっぱいだという。

(保育研究者)